

待つという工程。



ウイスキーが熟成することで味に深みが出るように、より高品質な発色、安定性を導くためには油絵具にも「熟成」が不可欠です。「熟成」は練りあがった絵具の空気を抜くことから始まります。そして空気を完全に追い出した絵具は、自然熟成に入り、空気を遮断した安定的な空間で一定期間寝かせ、なじませます。ホルベイン油絵具のやわらかな質感と発色には、「待つ」という工程も必要なのです。ホルベインの命は品質です。

●油絵具20号(110 ml)チューブ、全40色新登場。大きいサイズでも品質は変わりません。

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-10-4 TEL.03(2942)9211 大阪府東大阪市上小島1-9-10 TEL.06(5723)1514



holbein

ホルベイン絵具
www.holbein-works.co.jp

holbein

崔恩景

重なり合う色層を透して

鷹見明彦 文 森田ケン 写真*印



1988年、東京芸術大学大学院のアトリエにて。技法材料研究室から博士後期課程に進んで、テンペラと油彩の混合技法による制作を行うようになった このページ撮影=扇谷茂樹



1976

「病気で1年間、進学できなかった間、
ペンとインクで描くうちに、
自分の内面と世界の広がりが
絵のなかでつながっているのを知りました」

無題 1978 紙にペン、インク サイズ不明

一九八六年か八七年ごろだったと記憶するが、韓国からの留学生だというひとりの画家に出会った。空と大地のふところからゆっくりと滲みだしてきたような、表層の技巧とは対蹠地に熟成されつつあるそのタブローと、彼女が話す日本人以上に流暢で正確な日本語の美しさが印象的だった。

ソウルの新村 ソウル 崔恩景が育つた

街は、延世大や梨花大、韓国の現代美術の拠点である弘益大などの名門校が集まった文教地区の新市街である。崔は、四代つづく篤信なクリスチャンの家庭に生まれた。父は、仕事の関係で日本をときどき訪れていた。

「小学校のとき、全国コンクールで佳作賞をいただいたのが、絵が好きになったきっかけでした。真夏に李朝の景福宮を写生していたら、瓦屋根を一生懸命に塗ったクレヨンが溶けて、ふしぎな艶と広がりが生まれました。中学で「想像画」を自由に描かせてくれた美術の先生

1989

「テンペラの水彩に近い性質と層を着実に重ねられるところがわたしが求める絵に適っていました」

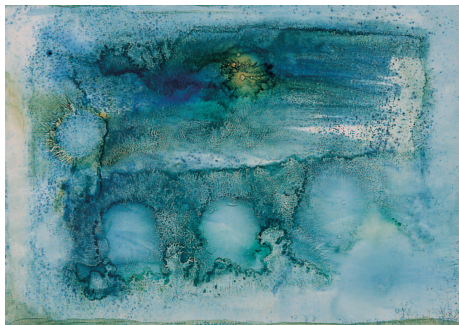


Unseen Rain No.2 1989
キャンバスにテンペラ、油彩 162x130.3cm
このページ撮影=扇谷茂樹

の影響や全国美術大会での入賞もあって、高校に進学するころには、美術の道に進むことに決めていた。一九七〇年代の韓国は、日本文化の輸入に規制があつて、出版物も特定の場所に限って購入できる高価な品だったが、家にあつた日本美術と西洋美術をまとめた平凡社の美術全集は、崔の大切な宝物だつた。大学の予備試験に合格しながら、病気で一年間の浪人生活を送ることになつた。そのころ、ペンとインクやクレヨンで、ドローイングをたくさん描いた。《無題》(一九七六)は、自分の絵画空間の原点を発見したそうした素描の一作。「画面のなかに描かれていく文字やかたちの中に、水の流れの内の拡がりのように自分の内面とつながる世界があるのを実感しました」。

美術の専科があるソウル女子師範大学に入学。「ここでの教育は、リアリズムが柱だつた。韓国では、戦後パリヘアンフォルメルの影響下に留学した世代が美術界を牽引し、現代美術も盛んだったが、この時点ではまだ関心が及ばず、崔が自国の現代絵画を認識したのは、日本に来てからだつた。韓国で学生のころには、パウル・クレイがもっとも好きな画家だつた。

卒業後に海外で暮らしてみたいという願望が高まつて、留学生試験を受けた。「日本への留学希望者は数えるほどでした」。



風と空と星と..... (尹東柱の詩から)
1989 紙に油彩 36.3x51.5cm



Beyond the Colours #55
(Hidden heaven) 2000
キャンバスにテンペラ、油
彩 130.3×97cm *

2000 「善と悪、喜びと悲しみ……。」

両極を揺れ動く魂の奥からの祈りの淵に、わたしの絵は生まれます」

大学の先輩のひとりが東京芸大へ留学していたのも日本をめざした理由ではあったが、八〇年代の後半あたりから、アジアからの留学生が急増する時期には、また間があった。八二年に来日。その前に芸大の大学院を受験するが、うまく行かずにデザインの専門学校を経て、創形美術学校に入学。同校を修了後に芸大の技法材料研究室にはいった。

《Unseen Rain No.2》(一九八九)は、芸大の博士後期課程に在籍したころの作品。ロウ・キャンバスにテンペラと油彩で、筆触や滲みが交錯し溶けあう層が瑞々しい絵画空間を生んでいる。

「テンペラは、水彩のようでありながら、乾くと耐水性になるので、下のかたちを活かしながら重ねられたり、油彩よりも顔料に近い発色のあざやかなところがわたしには適っていました」。最初は、小麦粉と卵を混ぜた非油性の練り込みテンペラを用いていたが、日本の湿度

ではカビやすいので、まもなく全卵テンペラに代えて油彩と交互に層をつくるようになった。「制作では画面と私との関係、対話が主題です。絵を描き始めると逆に画面が私に語りかけてきます」。

「筆の動いた痕跡、絵具の流れたしずくの跡、滲みの模様、重なりあうことで強められた色合いなどが、私を触発し、私のなかにある感情を湧き起こします」。

《風と空と星と……》(一九八九)は、キャンバスの作品とともに描きつけている紙の作品。タイトルは、韓国の詩人、尹東柱の詩による。

「おおきな宇宙のなかでは、人間は点に等しい星よりも小さな存在です。そうした人間の存在をおもつと、広い空間が意識されました」。

「もの派」のかつての発表場所だった神田の真木・田村画廊でアルバイトをして、李禹煥や菅木志雄に接する機会もあった。現代美術の見聞をひろげながら、日本に来てから観た昔の水墨画には、とても惹

谷中や入谷は甚大のころから住み慣れた街。十字架に見守られたアトリエには、画材とハングル、日本語、英語の聖書やキリスト教関係の書籍が整然と揃えられている *



チエ・ウンギョン(CHOI Eun-Kyoung) 1958年韓国ソウル生まれ。81年ソウル首都女子師範大学校絵画科卒業。82年来日。85年創形美術学校研究科修了。87年東京芸術大学大学院美術研究科油画技法材料科修了。90年同大学院博士後期課程修了。97年創形賞によりパリ留学(2000年まで)。おもな個展に86年田村画廊(東京)、88、89年ギャラリー+1(東京)、91年アートフォーラム谷中(東京)、90、92、94年藍画廊(東京)、97、00年シロタ画廊(東京)など。おもなグループ展には84-91年「女流画家協会」展(受賞2回、東京都美術館)、85-88年「国画」展(東京都美術館)、92年「両洋の眼 現代の絵画」展(日本橋・三越(東京)ほか)、92、95年「韓・日現代美術新世代」展(国立清州博物館(韓国))、94年「VOCA 94」展(上野の森美術館(東京))、95年「光州国際現代美術祭」(光州市立美術館(韓国))、99年「寺田コレクション」展(東京オペラシティアートギャラリー)、95-03年「両洋の眼 現代の絵画」展(03年河北倫明賞受賞)など。

かれる力を感じたという。
「牧谿の『瀟湘八景図』は、近くでみると紙と墨と筆が触れあった跡が染みのようにあるだけに、離れてみると何層かの世界が一枚の

紙の上にひろがって、生動している世界の空間が完全に描かれています。」
日本の湿気と海に降る雪を観るのが好きだという崔の作品は、七

〇年代から観る機会があった韓国のモノクロミニズムの絵画や李禹煥の平面が、乾性の素材感とミミマルな作法に空間を触知していたのとは別に、その湿潤な色層の裡に、いつも未知な世界の揺籃への憧れをあらわしているように映った。

《Beyond the Colours》#55 (Hidden heaven) (二〇〇〇年) 一九七年から三年間のパリ留学を経て深まりを見せる近作の一点。アイヌ・カラーが多かった以前の作品に対して、近年は、筆致よりも染みの繊細な相互浸透と重なり、白やブルーの明度のある作品が描かれていた。ここでは、ほの昏い溶融にゆだねた表情の奥に、存在を包摂するより巨きな闇と光の消息が浮揚されている。Hidden heaven(隠された天国)……。アトリエの中央には、木製の十字架が掲げられていた。窓辺に晩秋の閑かな宵闇が降りてきていた。

(二〇〇三年十一月十二日、東京・入谷の作家アトリエにて取材)

たかみ、あきひ、「美術評論家」